

日本語版への序文

ロシア哲学は、今日にいたるまで謎めいたほとんど知られざる領域であり、ロシアの外に暮らしている人たちにとつては、とくにそうである。哲学がどうあるべきか、についての今日的なイメージを完全に決定しているのは、西洋の思想の支配的な方向性であり、それは英米系の経験論哲学を継承して発展させたものである。ヨーロッパ哲学の歴史の最近の二〇〇年間は、二つの伝統——英米系の経験論哲学と大陸系（ドイツ系およびフランス系）の哲学——の対立という特徴をもってきた。前者の方向は、形而上学に批判的な態度をとつており、伝統的な哲学の諸問題の大部分（なによりもまず〈絶対者〉の問題）を放棄するよう勧めてきたし、科学的認識と比べて哲学には副次的な意義しかないと認めるよう求めてきた。後者は、それとは反対に、伝統的諸問題の体系をともなつた形而上学を、哲学の核心として保持してきたし、次のように主張してきた。すなわち、哲学とは——科学よりもさらに高次元の知識である、なぜなら、哲学は世界と人間の存在の絶対的で無限の根拠を理解しようとするが、科学は自然の諸対象の有限な諸形態しか研究しておらず、それらの無限の根拠を見ていないからだ、と。二つの伝統の大きな違いは、哲学の歴史、古典古代から現代までの過去に対する、異なる態度に起因していた。経験論哲学は、十七—十八世紀に多くの点で科学の発展に負うかたちで誕生し、すでにその最初の代表者たち（J・ロック、D・ヒューム、P・ドルバック、その他）は、自分たち自身と経験論に関連するすべてのもの以外の、すべての他の形式の哲学的知識の意義を否定していた。大陸系哲学（なによりもまずドイツ哲学）は、

哲学的知識の歴史的な一体性を認めており、それゆえ過去に創られた諸体系すべてに敬意を払って接していた。この大陸系の伝統に属している思想家たちのなかで、非古典哲学に分類され、古典哲学のいくつかの原理的諸要素を厳しく批判してきた思想家たち（F・ニーチェ、H・ベルクソン、H・リッケルト、M・ハイデガー、J・P・サルトル、その他）ですら、それでもやはり何世紀にもわたるヨーロッパ思想の歴史から完全に断絶することなど念頭においていなかったし、現代にとって、その歴史がアクチュアリティをもってしていることを認めていた。

第二次世界大戦後に、アメリカ合衆国と英国が西洋世界において政治的優位性を得たことによって、ヨーロッパ哲学において最終的に勝利したのは、まさに英米系哲学の伝統であった。その最終的表現になったのは、新実証主義およびポスト実証主義と分析哲学だった。

これらの形態をとった西洋哲学は、本質的に科学的認識の一部となったが、それは伝統的な意味での哲学ではない。科学的方法論を全面的に採用することによって西洋哲学は、自らの歴史的起源を、つまり、自らの主たる使命を——自然的過程に還元することができず、自然法則に従属していない人間存在の特殊性を説明するという使命を——最終的に断念した。

きわめて特徴的なのは、フランス哲学の最近のオリジナルな学派となったのがポストモダンイズムであり、それが宣言したのが、あらゆる種類の経験論とまったく同じように、過去との決別だったという点である。ポストモダンイズムの創始者たち（J・F・リオタール、G・ドゥルーズ、F・ガタリ）の主張によれば、現代（ポスト近代）は、二十世紀後半からはじまったが、それは人類史上の先行する全ての時代と比べると、あまりにも異質で、それと類似していないので、この現代にとって過去の文化的経験はもはや意味をもつはずはなく、「ポスト近代」の時代は自身の法則にもとづいて存在しているのであって、過去にはまったく依存していないという。

この思想は、高尚な目的——あらゆる形態の強制や支配からの人間の解放——のために打ち出されたものだった。しかしながら、この思想は、自身もたらそうと望んだこととはまったく正反対の結果をもたらした。実際には、この思想体系は人間と文化の衰退を意味していた。なぜなら、国民的な文化的伝統が人間を「支配すること」は——否定的要因ではなく肯定的要因であり、人間の文化的・精神的発展の基盤だからである。西洋の思想体系の現代的形態は、現代人と過去の文化との結びつきの必然性を否定することによって、人間から、その内的世界の

発展のための基盤を奪っている。その結果、これらの諸原理の作用がもたらすのは、次のような事態である。すなわち、西洋社会は、ますます大いに「一次元的」人間たち（H・マルクーゼの表現による）の社会になっていく、つまり、どんな明白な外的強制システムからも命令されていないのであるから、自分たちは自由であると考えているが、実際には、まったく自由のない人間たちの社会になっていく。なぜなら、自由を規定しているのは、個人の内面的な精神の豊かさであって、外面的行為の自由ではないからである。

もしも、現代の西洋世界は——その思想的リーダーたちが言うような——安泰な世界ではないと主張する者たちの声に耳を傾けるならば、もしも、西欧文明は深刻な危機をむかえていて、この危機の原因となったのは、旧来の精神的諸価値の否定、新しいひどく誤った諸価値の君臨であり、そのなかでも物質的幸福という価値の支配である、ということを確認するとするならば、現代の西洋哲学に対して今日なされている評価とはまったく別の評価をおこなう必要があるだろう。歴史の全期間にわたって働いてきた、ヨーロッパ哲学の最も重要な機能とは、この哲学が、個々の国民あるいはヨーロッパ人全体の自己意識として役立ってきた点にある。まさにそれゆえに、危機の時代の哲学者たちは、誰よりもいち早く正確に危機の原因を解明し、そこからの脱出のための何らかの道を見つけたそうと試みてきた。しかし、西洋世界の現代の危機の特徴は、哲学者たちが危機の発生を阻止するのではなく、促してきた点にある（少なくとも実証主義とポストモダンニズムという支配的潮流においてはそうである）。それが原因で、最近の数十年のあいだに哲学そのものが、西洋文明の完全に信用を失った価値の一つになってしまった。

現代の西洋哲学と比べて、ロシア哲学はまったく「非現代的な」哲学に見える。つまり、「科学性」の基準に対応しておらず、あまりにも宗教と形而上学に執着しすぎており、世界のなかでのロシアの歴史的使命の問題（それは「ロシア的理念」^{イデア}と呼び慣わされている）というような「イデオロギー的」問題設定を志向しすぎているように見える。そのうちの最も特色のある卓越した哲学は、十九—二十世紀初頭の（ソビエト時代以前の）ロシア哲学においても、また現代ロシアの哲学においても、西洋哲学の主要な傾向から、まちがいに決別している。しかし西洋社会の危機について先に述べたこと全体を考慮するならば、まさにその「非現代的」と過去の伝統への忠実さゆえに、ロシア哲学は現代の西洋哲学よりも大きな活力があり、未来への展望をもっている。

ロシア哲学は、十九世紀から二十世紀初頭に、つまり、それがとくに集中的に発展した時期に、ヨーロッパ哲

学の歴史全体の最も価値ある諸成果を利用することを絶えず志向していた。一八八〇年のA・プーシキンにささげた有名な演説で、F・ドストエフスキーは、ロシア文化の最も重要な特徴とは、その「全人類的」性格、すべての異なる諸文化（なによりもまず、もちろん、ヨーロッパ文化）を自ら進んで受容し、それらの諸文化を自己の内で統合しようとする志向である、と主張した。この主張は、全体としての文化に関してだけでなく、その個々の構成要素に関しても正しい。ロシア哲学について、この文脈を踏まえて、何よりもまず次に言う必要がある。すなわち、最良のロシア的思想家たちが、その思想体系のなかで示しているのは、ヨーロッパ哲学のあらゆる主要な諸成果の独創的な「総合」であり、ロシア哲学の伝統を理解することは、ヨーロッパ哲学の歴史全体の文脈を抜きにしては不可能である、と。

残念ながら、一九一七年革命以降、それ以前のロシア哲学の伝統は中断された。一九三〇—五〇年代に形成されたソビエト・マルクス主義哲学は、とくに社会と歴史の研究において自らの諸成果を残したとはいえ、理念やコンセプトの面で、革命前の哲学に比べて貧弱だった。しかしながら、一九九〇年代以降、古いロシア哲学のさまざまな伝統がゆつくりと再生してきている。その際、現代ロシアの哲学者たちは、これらの伝統を、ソビエト哲学の最も重要な成果および二十世紀前半の西洋哲学——西洋思想の最後の実り豊かな発展段階——のさまざまな独創的な構想と一つに結びつけている。

もし、われわれの時代の西洋哲学が危機にあるということに同意するならば、次のことを認める必要がある。すなわち、この危機からの脱出は、実証主義やポストモダンニズムの思想体系の支配が克服されて、ヨーロッパ哲学がその形而上学的源泉——何百年もの、その多面的な発展を保証してくれてきた源泉——に回帰してはじめて可能になるだろう、という点である。それと同時に認めることができるのは、自分自身の過去との継承関係を保持してきたロシアの哲学は、その過去をとおして、しかも哲学の歴史全体と結びつくことによって、ヨーロッパ哲学が今の危機を克服した後の、哲学全体の発展の新しい段階の基盤となるべきパラダイムに、最も近いという点である。

その意味で、ロシア哲学の歴史の研究は、十分にアクチュアルで重要な仕事である。将来の哲学を創り出す展望を切り開くことができるのは、ロシアの思想家たちによって錬磨されてきた最も重要な諸理念や諸原理を、まさに理解して摂取することによってである。この将来の哲学は、人間を「神経系コンピューター」と見なす現代

の素朴な考え方から脱却して、人間を無限の謎に満ちた存在者——自然法則に従属せず、科学的方法による認識では到達することができない存在者——として理解するだろう。そのときには、哲学そのものも、哲学が常にそうだったし、また、そうであるべきものになるだろう、つまり、人間の超自然的な本質と、人間の生の目的を説明する知識の最高の形式になるだろう。

二〇二一年一月六日

イーゴリ・エヴラームピエフ